

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	柴山 沙織
論文担当者	主 査 木村 卓
	副 査 松永 寿人
	副 査 若林 一郎
学位論文名	Diagnostic Value of Electroencephalography in Dementia
	with Lewy Bodies
	(レビー小体型認知症診断における脳波検査の有用性)
本研究の目的は、レビー小体型認知症（DLB）診断における脳波検査の有用性を、アルツハイマー型認知症（AD）や核医学検査結果との比較により検討することである。 2013年3月から2020年10月までに兵庫医科大学病院でDLBまたはADと診断・脳波検査を実施した患者32例（DLB患者16例：男性11例・女性5例・平均年齢78.8±4.6歳、AD患者16例：男性7例・女性9例・平均年齢80.9±7.1歳）の脳波について、背景活動の周波数を計測した。DLB患者とAD患者とで、測定部位、改訂長谷川式簡易認知スケール（HDS-R）スコア、および発症時期などにより平均脳波周波数を比較した。さらにfrontal intermittent rhythmic delta activity（FIRDA）の出現率についてDLB患者とAD患者とで比較した。また、脳波検査と同時期に核医学検査を行ったDLB患者について脳波平均周波数とドパミントランスポーター（DAT）シンチグラフィ Specific Binding Ratio（SBR）値を比較検討した。 DLB患者の平均脳波周波数はAD患者に比して低かった。測定部位による比較では、後頭部においてのみ、DLB患者とAD患者とで脳波平均周波数に統計学的有意差が認められた（$p<0.05$）。HDS-Rスコアで分けて両者の脳波平均周波数を比較した結果では、DLBの方が平均値は低かったものの、統計学的有意差は得られなかった。発症1年未満での比較においても同様であった。FIRDAの出現率はDLB患者37.5%、AD患者12.5%であった。平均脳波周波数とDATシンチグラフィSBR値との間に有意な相関関係は認められなかった。 脳波検査はDLBとADの鑑別診断にとって有用であると思われる。しかしDLBの病態の進行や治療効果の評価に対する脳波検査の重要性を決定づけるにはさらなる研究が必要である。 本研究はDLBとADの鑑別における脳波検査の有用性を検証するもので、実臨床につながる重要な知見であり、学位授与に値するものと判断した。	